

源氏物語

蜩

紫式部

青空文庫

身にしみて物を思へと夏の夜の螢ほの

かに青引きてとぶ

(晶子)

源氏の現在の地位はきわめて重いがもう廷臣としての繁忙もここまでは押し寄せて来ず、のどかな余裕のある生活ができるのであったから、源氏を信頼して来た恋人たちにもそれぞれ安定を与えることができた。しかも対^{たい}の姫君だけは予期せぬ煩悶^{はんもん}をする身になっていた。大夫^{たゆう}の監^{げん}の恐ろしい懸想^{けそう}とはいっしょにならぬにもせよ、だれも想像することのない苦しみが増えられているのであったから、源氏に持つ反感は大きかった。母君さえ死んでいなかったならと、またこの悲しみを新たにすることになったのであった。源氏も打ち明けてからはいつそう恋しさに苦しんでいるのであるが、人目をはばかってまたこのことには触れない。ただ堪えがたい心だけを慰めるためによく出かけて来たが、玉鬘^{たまかずら}のそばに女房などのあまりいない時にだけは、はつと思わせられるようなことも源氏は言った。あらわに退けて言うこともできないことであつたから玉鬘はただ気のつかぬふうをするだけであつた。人柄が明るい朗らかな玉鬘であつたから、自分自身ではまじめ一方な気なの

であるが、それでもこぼれるような愛嬌あいぎようが何にも出てくるのを、兵部卿ひょうぶぎようの宮などはお知りになって、夢中なほどに恋をしておいでになった。まだたいして長い月日がたつたわけではないが、確答も得ないうちに不結婚月の五月にさえなつたと恨んでおいでになつて、

ただもう少し近くへ伺うことをお許しくだすつたら、その機会に私の思い悩んでいる心を直接お洩もらしして、それによつてせめて慰みたいと思います。

こんなことをお書きになつた手紙を源氏は読んで、

「そうすればいいでしょう。宮のような風流男のする恋は、近づかせてみるだけの価値はあるでしょう。絶対にいけないなどとは言わないほうがよい。お返事を時々おあげなさいよ」

と源氏は言つて文章をこう書けとも教えるのであつたが、何重にも重なる不快というようなものを感じて、気分が悪いから書かれないと玉鬘たまむすめは言つた。こちらの女房には貴族出の優秀なような者もありないのである。ただ母君の叔父おじの宰相の役を勤めていた人の娘で、れいりで怜悧な女が不幸な境遇にいたのを捜し出して迎えた宰相の君というのは、字などもきれいに書き、落ち着いた後見役も勤められる人であつたから、玉鬘が時々やむをえぬ男の手

紙に返しをする代筆をさせていた。その人を源氏は呼んで、口授して宮へのお返事を書かせた。聞いていて玉鬘が何と言うかを源氏は聞きたかったのである。姫君は源氏に恋をささやかれた時から、兵部卿の宮などの情をこめてお送りになる手紙などを、少し興味を持つてながめることがあった。心がそのほうへ動いて行くというのではなしに、源氏の恋からのがれるためには、兵部卿の宮に好意を持つふうを装うのも一つの方法であると思うのである。この人にも技巧的な考えが出るものである。

源氏自身がおもしろがって宮をお呼び寄せしようとしているとは知らずに、思いがけず訪問を許すという返事をお得になった宮は、お喜びになって目だたぬふうで訪ねておいでになった。妻戸の室に敷き物を設けて几帳きちようだけの隔てで会話がなさるべくできていた。心憎いほどの空薫そらだきをさせたり、姫君の座をつくろったりする源氏は、親でなく、よこしまな恋を持つ男であつて、しかも玉鬘たまかずらの心にとっては同情される点のある人であつた。宰相の君なども会話の取り次ぎをするのが晴れがましくてできそうな気もせず隠れているのを源氏は無言で引き出したりした。

夕闇ゆうやみ時が過ぎて、暗く曇った空を後ろにして、しめやかな感じのする風采ふうさいの宮がすわつておいでになるのも艶えんであつた。奥の室から吹き通う薫香たきものの香に源氏の衣服から散

る香も混じつて宮のおいになるあたりは匂においに満ちていた。予期した以上の高華こうげな趣の添った女性らしくまず宮はお思ひになつたのであつた。宮のお語りになることは、じみな落ち着いた御希望であつて、情熱ばかりを見せようとあそばすものでもないのが優美に感ぜられた。源氏は興味をもつてこちらで聞いているのである。姫君は東の室に引き込んで横になつていたが、宰相の君が宮のお言葉を持つてそのほうへはいつて行く時に源氏は言ことづけた。

「あまりに重苦しいしかたです。すべて相手次第で態度を変えることが必要で、そして無難です。少女らしく恥ずかしがつている年齢としでもない。この宮さんなどに人づてのお話などをなさるべきでない。声はお惜しみになつても少しは近い所へ出ていないではいけませんよ」

などと言う忠告である。玉鬘は困つていた。なおこうしていればその用があるふうをしてそばへ寄つて来ないとは保証されない源氏であつたから、複雑な侘わびしさを感じながら玉鬘はそこを出て中央の室の几帳きちやうのところへ、よりかかるような形で身を横たえた。宮の長いお言葉に対して返辞がしにくい気がして玉鬘が躊躇ちゆうちよしている時、源氏はそばへ来て薄物の几帳の垂れたを一枚だけ上へ上げたかと思うと、蠟ろうの燭ひをだれかが差し出したかと

思うような光があたりを照らした。玉鬘は驚いていた。夕方から用意して螢^{ほたる}を薄^{うす}様の紙へたくさん包ませておいて、今まで隠していたのを、さりげなしに几帳を引き繕うふうをしてにわかに袖^{そで}から出したのである。たちまちに異常な光がかたわらに湧^わいた驚きに扇で顔を隠す玉鬘の姿が美しかった。強い明りがさしたならば宮も中をおのぞきになるであろう、ただ自分の娘であるから美貌^{びぼう}であろうと想像をしておいでになるだけで、実質のこれほどすぐれた人とも認識しておいでにならないであろう。好色^やなお心を遣^やる瀬ないものにして見せようと源氏が計ったことである。実子の姫君であつたならこんな物狂わしい計らいはしないであろうと思われる。源氏はそつとそのまま外の戸口から出て帰ってしまった。宮は最初姫君のいる所はその辺であろうと見当をおつけになつたのが、予期したよりも近い所であつたから、興奮をあそばしながら薄物の几帳の間から中をのぞいておいでになつた時に、一室ほど離れた所に思いがけない光が湧いたのでおもしろくお思いになった。まもなく明りは薄れてしまつたが、しかも瞬間のほのかな光は恋の遊戯にふさわしい効果があつた。かすかによりは見えなかつたが、やや大柄な姫君の美しかった姿に宮のお心は十分に惹^ひかれて源氏の策は成功したわけである。

「鳴く声も聞こえぬ虫の思ひだに人の消つには消ゆるものかは

御実験なすつたでしょう」

と宮はお言いになった。こんな場合の返歌を長く考え込んでからするのは感じのよいものでないと思つて、玉鬘たまかづらはすぐに、

声はせで身をのみこがす螢こそ言ふよりまさる思ひなるらめ

とはかないふうに言つただけで、また奥のほうへはいってしまった。宮は疎々うとうとしい待遇を受けるというような恨みを述べておいでになった。あまり好色らしく思わせたくなないと宮は朝まではおいでにならずに、軒の雫しずくの冷たかかろのに濡れて、暗いうちにお歸りになった。杜鵑ほととぎすなどはきつと鳴いたであらうと思われる。筆者はそこまで穿鑿せんさくはしなかつた。

宮の御風采ふうさいの艶えんな所が源氏によく似ておいでになると言つて女房たちは賞ほめていた。昨夜ゆうべの源氏が母親のような行き届いた世話をした点で玉鬘たまかづらの苦悶くもんなどは知らぬ女房たちが

感激していた。玉鬘は源氏に持たれる恋心を自身の薄倖はっこうの現われであると思った。実の父に娘を認められた上では、これほどの熱情を持つ源氏を良人おとこにすることが似合わないことではないかもしれぬ、現在では父になり娘になっているのであるから、両者の恋愛がどれほど世間の問題にされることであろうと玉鬘は心を苦しめているのである。しかし眞実は源氏もそんな醜い關係にまで進ませようとは思っていない。ただ恋を覚えやすい性格であつたから、中宮などに対しても清い父親としてだけの愛以上のものをいだいていないのではない、何かの機会にはお心を動かそうとしながらも高貴な御身分にはばかられてあらわな恋ができないだけである。玉鬘は性格にも親しみやすい点があつて、はなやかな気分のおふれ出るようなのを見ると、おさえている心がおどり出して、人が見れば怪しく思うほどのことも混じつていくのであるが、さすがに反省をして美しい愛だけでこの人を思おうとしていた。

五日には馬場殿へ出るついでにまた玉鬘を源氏は訪ねた。たず

「どうでしたか。宮はずつとおそくまでおいでになりましたか。際限なく宮を接近おさせないようにしましょう。危険性のある方だからね。力で恋人を征服しようとする人は少ないからね」

などと宮のことも活か^いせも殺しもしながら訓戒めいたことを言っている源氏は、いつもそうであるが、若々しく美しかった。色も光沢^{つや}もきれいな服の上に薄物の直衣^{のうし}をありなしに重ねているのなども、源氏が着ていると人間の手で染め織りされたものとは見えない。物思いがなかったなら、源氏の美は目をよろこばせることであろうと玉鬘は思った。兵部^{ひょうぶ}卿の宮からお手紙が来た。白い薄様^{うすよう}によい字が書いてある。見て美しいが筆者が書いてしまえばただそれだけになることである。

今日^{けふ}さへや引く人もなき水隠^みれに生^おふるあやめのねのみ泣かれん

長さが記録になるほどの菖蒲^{しょうぶ}の根に結びつけられて来たのである。

「ぜひ今日はお返事をなさい」

などと勧めておいて源氏は行ってしまった。女房たちもぜひと言うので玉鬘自身もどうい^うわけもなく書く気になっていた。

あらはれていとど浅くも見ゆるかなあやめもわかず泣かれけるねの

おとめ
少女らしく。

とだけほのかに書かれたらしい。字にもう少し重厚な気が添えたいと芸術家的な好みを持つておいでになる宮はお思いになったようであつた。

今日は美しく作つた薬玉くすだまなどが諸方面から贈られて来る。不幸だったところと今とがこんなことにも比較されて考えられる玉鬘たまかづらは、この上できるならば世間の悪名を負わずに済ませたいともつともなことを願つていた。

源氏は花散里夫人はなちるさとの所へも寄つた。

「中将が左近衛府さこんえふの勝負のあとで役所の者を皆つれて来ると言つてましたからその用意をしておくのですね。まだ明るいうちに来るでしょう。私は何も麗々しく扱おうと思つていなかった姫君のことを、若い親王がたなどもお聞きになつて手紙などをよくよこしておいでになるのだから、今日はいいい機会のよう思つて、東の御殿へ何人も出ておいでになることになるでしょうから、そんなつもりで仕度したくをさせておいてください」

などと夫人に言つていた。馬場殿はこちらの廊からながめるのに遠くはなかった。

「若い人たちは渡殿わたのだの戸をあけて見物するがよい。このごろの左近衛府にはりっぱな下

土官がいて、ちよつとした殿上役人などは及ばない者がいますよ」

と源氏が言うのを聞いていて、女房たちは今日の競技を見物のできることを喜んだ。玉鬘のほうからも童女などが見物に来ていて、廊の戸に御簾が青やかに懸け渡され、はなやかな紫ぼかしの几帳がずっと立てられた所を、童女や下仕えの女房が行き来していた。菖蒲重ねのあこめ薄藍色の上着を着たのが西の対の童女であつた。上品に物馴れたのが四人来ていた。下仕えは櫓の花の色おうちのぼかしの裳に撫子色の服、若葉色の唐衣などを装うていた。こちらの童女は濃紫に撫子重ねの汗衫などでおおような好みである。双方とも相手に譲るものでないというふうに氣どっているのがおもしろく見えた。若い殿上役人などは見物席のほうに心の惹かれるふうを見せていた。午後二時に源氏は馬場殿へ出たのである。予想したとおり親王がたもおおせい来ておいでになった。左右の組み合わせなどに宮中の定例の競技と違って、中少将が皆はいって、こうした私の催しにかえって興味のあるものが見られるのであつた。女にはどうして勝負が決まるのかも知らぬことであつたが、舍人までが艶な装束をして一所懸命に競技に走りまわるのを見るのはおもしろかつた。南御殿の横まで端は及んでいたから、紫夫人のほうでも若い女房などを見物していた。「打毬楽」「納蘇利」などの奏楽がある上に、右も左も勝つたびに歓呼に代えて

樂声をあげた。夜になって終わるころにはもう何もよく見えなかった。左近衛府の舎人^{さこんえふとねり}たちへは等差をつけていろいろな纏頭^{てんとう}が出された。ずっと深更になってから来賓は退散したのである。源氏は花散里のほうに泊まるのであった。いろいろな話が夫人とかわされた。「兵部卿の宮はだれよりもごりつぱなようだ。御容貌などはよろしくないが、身の取りなしなどに高雅さと愛嬌^{あいきょう}のある方だ。そのほかはよいと言われている人たちにも欠点があるいろいろある」

「あなたの弟様でもあの方のほうが老けてお見えになりますね。こちらへ古くからよくおいでになると聞いていましたが、私はずっと昔に御所で隙見^{すきみ}をしてお知り申し上げているだけですから、今日お顔^{きょう}を見て、そのころよりきれいにおなりになったと思いました。帥^{そう}の宮様はお美しいようでも品がおよろしくなくて王様というくらいにしかお見えになりませんでした」

この批評の当たっていることを源氏は思ったが、ただ微笑^{ほほえ}んでいただけであつた。花散里夫人の批評は他の人たちにも及んだのであるが、よいとも悪いとも自身の意見を源氏は加えようとしないのである。難をつけられる人とか、悪く見られている人とかに同情する癖があつたから。右大将のことを深味のあるような人であると夫人が言うのを聞いても、

たいしたことがあるものでない、媚などにしては満足してられないであろうと源氏は否定したく思ったが、表へその心持ちを現わそうとしなかった。睦まじくしながら夫人と源氏は別な寢床に眠るのであった。いつからこうなってしまったのかと源氏は苦しい気がした。平生花散里夫人は、源氏に無視されていると腹をたてるようなこともないが、六条院にはなやかな催しがあつても、人づてに話を聞くぐらいで済んでいるのを、今日は自身の所で会があつたことで、非常な光榮にあつたように思っているのであった。

その駒もすさめぬものと名に立てる汀の菖蒲こま みぎは あやめ今日や引きつる

とおおように夫人は言った。何でもない歌であるが、源氏は身にしむ気がした。

にほ鳥に影を並ぶる若駒はいつか菖蒲あやめに引き別るべき

と源氏は言った。意はそれでよいが夫人の謙遜けんそんをそのまま肯定した言葉は少し気の毒である。

「二六時中あなたといっしょに居るのではないが、こうして信賴をし合つて暮らすのはいふことですね」

戯れを言うのでもこの人に対してはまじめな調子にされてしまふ源氏であつた。帳台の中の床を源氏に譲つて、夫人は几帳きちようを隔てた所で寝た。夫婦としての交渉などはもはや不似合いになつたとして居る人であつたから、源氏もしいてその心を破ることをしなかつた。

梅雨つゆが例年よりも長く続いていつ晴れるとも思われないうころの退屈さに六条院の人たちも絵や小説を写すのに没頭した。明石夫人あかしはそんなほうの才もあつたから写し上げた草紙などを姫君へ贈つた。若い玉鬘たまかざらはまして興味を小説に持つて、毎日写しもし、読みもすることに時を費やしていた。こうしたことの相手を勤めるのに適した若い女房が何人も居るのであつた。数奇な女の運命がいろいろと書かれてある小説の中にも、事実かどうかは別として、自身の体験したほどの変わったことにあつて居る人はないと玉鬘は思った。住吉すみよしの姫君がまだ運命に恵まれていたころは言うまでもないが、あとにもなお尊敬されているはずの身分でありながら、今一步で卑しい主計頭かすえのかみの妻にされてしまふ所などを読んでは、恐ろしかつた監げんのことが思われた。源氏はどこの御殿にも近ごろは小説類が引き

散らされているのを見て玉鬘に言った。

「いやなことですね。女というものはうるさがらずに人からだまされるために生まれたものなんですね。ほんとうの語られているところは少ししかないのだろうが、それを承知で夢中になって作中へ同化させられるばかりに、この暑い五月雨さみだれの日に、髪かみの乱れるのも知らずに書き写しをするのですね」

笑いながらまた、

「けれどもそうした昔の話を讀んだりすることがなければ退屈は紛れないだろうね。この嘘うそごとの中にほんとうのことらしく書かれてあるところを見ては、小説であると知りながら興奮をさせられますね。可憐かれんな姫君が物思ものおもいをしているところなどを讀むとちよつと身にしむ気もするものですよ。また不自然な誇張がしてあると思ひながらつり込まれてしまうこともあるし、またまずい文章だと思ひながらおもしろさがある個所にあることを否定できないようなものもあるようです。このごろあちらの子供が女房などに時々讀ませているのを横で聞いていると、多弁な人間があるものだ、嘘うそを上手じょうずに言い馴なれた者が作るのだという気がします、そうじゃありませんか」

と言うと、

「そうでございますね。嘘を言い馴れた人がいろんな想像をして書くものでございましょうが、けれど、どうしてもほんとうとしか思われないのでございますよ」

こう言いながら 玉たまかずら鬘すずりは硯を前へ押しやった。

「不風流に小説の悪口を言つてしまいましたね。神代以来この世であつたことが、日本紀にほんぎなどはその一部分に過ぎなくて、小説のほうに正確な歴史が残つているのでしよう」

と源氏は言うのであつた。

「だれの伝記とあらわに言つてなくても、善いことよ、悪いことを目撃した人が、見ても見飽かぬ美しいことや、一人が聞いているだけでは憎み足りないことを後世に伝えたいと、ある場合、場合のことを一人でだけ思つていられなくなつて小説というものが書き始められたのだろう。よいことを言おうとすればあくまで誇張してよいことづくめのことを書くし、また一方を引き立てるためには一方のことを極端に悪いことづくめに書く。全然架空のことではなくて、人間のだれにもある美点と欠点が盛られているものが小説であると思ればよいかもしれない。支那しなの文学者が書いたものはまた違ふし、日本のも昔できたものと近ごろの小説とは相異していることがあるでしょう。深さ浅さはあるだろうが、それを皆嘘であると断言することはできない。仏が正しい御心みこころで説いてお置きになつた経の中

にも方便ということがあつて、大悟しない人間はそれを見ると疑問が生じるだろうと思われ。方等經ほうとうきようの中などにはことに方便が多く用いられています。結局は皆同じことになつて、菩提心ぼだいしんはよくて、煩惱ぼんのうは悪いということが言われてあるのです。つまり小説の中に善悪を書いてあるのがそれにあたるのですよ。だから好意的に言えば小説だつて何だつて皆結構なものだということになる」

と源氏は言つて、小説が世の中に存在するのを許したわけである。

「それにしてもね、古いことの書いてある小説の中に私ほどまじめな愚直過ぎる男の書いてあるものがありますか。それからまた人間離れのしたような小説の姫君だつてあなたのように恋する男へ冷淡で、知つて知らぬ顔をするようなのはないでしょう。だからありふれた小説の型を破つた小説にあなたと私のことをさせましょう」

近々と寄つて来て源氏は玉鬘たまかずらにこうささやくのであつた。玉鬘は襟えりの中へ顔を引き入れるようにして言う。

「小説におさせにならないでも、こんな奇怪なことは話になつて世間へ広まります」

「珍しいことだというのですか。そうです。私の心は珍しいことにときめく」

ひたひたと寄り添つてこんな戯れを源氏は言うのである。

「思ひ余り昔のあとを尋ぬれど親にそむける子ぞ類たぐひなき

不孝は仏の道でも非常に悪いことにして説かれています」

と源氏が言つても、玉鬘は顔を上げようとしなかった。源氏は女の髪をなでながら恨み言を言つた。やつと玉鬘は、

古き跡を尋ぬれどげになかりけりこの世にかかる親の心は

こう言つた。源氏は気恥ずかしい気がしてそれ以上の手出しはできなかった。どうこの二人はなつていくのであろう。

紫夫人も姫君に託してやはり物語を集める一人であつた。「こま物語」の絵になつているのを手に取つて、

「上じょうず手にできた画えだこと」

と言いながら夫人は見ていた。小さい姫君が無邪気なふうで昼寝をしているのが昔の自

分のような気がするのであった。

「こんな子供どうしでも悪い関係がすぐにできるじゃありませんか。昔を言えば私などは模範にしてよいまれな物堅さだった」

と源氏は夫人に言った。そのかわりにまれなことも好きであつたはずである。

「姫君の前でこうした男女関係の書かれた小説は読んで聞かせないようにするほうがいい。恋をし始めた娘などというものが、悪いわけではないが、世間にはこんなことがあるのだと、それを普通のことに思うてしまわれるのが危険ですからね」

こんな周到な注意が実子の姫君には払われているのを、対の姫君が聞いたら恨むかもしれない。

「浅はかな、ある型を模倣したにすぎないような女は読んでいましていいやになります。空穂物語の藤原ふじわらの君の姫君は重々しくて過失はしそうでない性格ですが、あまり真直まっすぐな線ばかりで、しまいまで女らしく書かれてないのが悪いと思うのですよ」

と夫人が言うと、

「現実の人でもそのとおりですよ。風変わりな一本調子で押し通して、いいかげんに転向することを知らない人はかわいそうだ。見識のある親が熱心に育てた娘がただ子供らしい

ところにだけ大事がられた跡が見えて、そのほかは何もできないようなのを見ては、どんな教育をしたのかと親までも軽蔑けいべつされるのが気の毒ですよ。なんといってもあの親が育てたらしいよいところがあると思われるような娘があれば親の名誉になるのです。作者の賞めほめちぎつてある女のすること、言うことの中に首肯されることのない小説はだめですよ。いったいつまらない人に自分の愛する人は賞めさせたくない」

などと言つて、源氏は姫君を完全な女性に仕上げることに一所懸命であつた。継母ままはが意地悪をする小説も多かったから、その反対な継母のよさを見せつける気がして夫人はそんなものをいっさい省いて選択に選択をしたよいものだけを姫君のために写させたり絵に描かかせたりした。

中将を源氏は夫人の住居すまいへ接近させないようにしていたが、姫君の所へは出入りを許してあつた。自分が生きている間は異腹の兄弟でも同じであるが、死んでからのことを思うと早くから親みしませておくほうが双方に愛情のできることであると思つて、姫君のほうの南側の座敷の御簾みすの中へ来ることを許したのであるが、台盤所だいばんどころの女房たちの集まつていほうへはいることは許してないのである。源氏のためにただ二人だけの子であつたから兄妹を源氏は大事にしていた。中将は落ち着いた重々しいところのある性質であつたから、

源氏は安心して姫君の介添え役をさせた。幼い雛遊びの場にもよく出会うことがあって、中将は恋人とともに遊んで暮らした年月をそんな時にはよく思い出されるので、妹のためにもよい相手役になりながらも時々はしおしおとした気持ちになった。若い女性たちに恋の戯れを言いかけても、将来に希望をつながせるようなことは絶対にしなかった。妻の一人にしたいと心の惹かれるような人も、しいて一時的の対象とみなして、それ以上関係を進行させることもなかった。今でも緑の袖とはずかしめられた人との関係だけを尊重して、その人以外の人を妻に擬して考えることは不可能であった。許されようと熱心ぶりを見せれば伯父おじの大臣も夫婦にしてくれるであろが、恨めしかったところに、どんなことがあつても伯父が哀願するのでなければ結婚はすまいと思つたことが忘れなかった。雲井くもいの雁かりの所へは情けをこめた手紙を常に送つていても、表面はあくまでも冷静な態度を保つていたのである。この態度をまた雲井の雁の兄弟たちは恨んでいた。

玉鬘たまかすらに右近中将は深く恋をして仲介役するのは童女のみるこだけであつたから、たよりなさにこの中将を味方に頼むのであつた。

「人のことではそう熱心になれない問題だから」
などと左中将は冷淡に言つていた。

内大臣は腹はら々に幾人もの子があつて、大人になつたそれぞれの子息の人柄にしたがつて政権の行使が自由なこの人は皆適した地位につかせていた。女の子は少なくとも後の競争きさきに負け失意の人になつてゐる女御にようと恋の過失をしてしまつた雲井の雁だけなのであつたら、大臣は残念がつていた。この人は今も撫子なでしこの歌を母親が詠よんできた女の子を忘れなかつた。かつて人にも話したほどであるから、どうしたであらう、たよりない性格の母親のために、あのかわいかつた人を行方不明ゆくえにさせてしまつた、女というものは少しも目が放されないものである、親の不名誉を思わずに卑しく零落をしながら自分の娘であると言つてゐるのではなからうか、それでもよいから出て来てほしいと大臣は恋しがつていた。

息子むすこたちにも、

「もしそういうことを言つてゐる女があつたら、氣をつけて聞いておいてくれ。放縦な恋愛もずいぶんしてゐた中で、その母である人はただ軽々しく相手にしてゐた女でもなく、ほんとうに愛してゐた人なのだが、何でもないことで悲観して、私に少ない女の子一人をどこにゐるかもしれないとされてしまつたのが残念でならない」

とよく話してゐた。中ほどには忘れてゐたのであるが、他人がすぐれたふうにならずに娘を

ことが多くなつて、近ごろは急に別れた女の子を思うようになったのである。ある夢を見た時に、上手じょうずな夢占いをする男を呼んで解かせてみると、

「長い間忘れておいでになつたお子さんで、人の子になつていらつしやる方のお知らせをお受けになるといふようなことはございせんか」

と言つた。

「男は養子になるが、女というものはそう人に養われるものではないのだが、どういふことになつてゐるのだろう」

と、それからは時々内大臣はこのことを家庭で話題にした。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

※「ただもう少し近くへ伺うことをお許しくだすつたら、その機会に私の思い悩んでいる心を直接お洩《も》らしして、それによってせめて慰みたいと思います。」の部分は、手紙の一部であると判断し、他の箇所に合わせて一字下げとしました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語 蜩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>